

序章 十世紀文学における「語り」と「書記」の問題について

本書は、平安時代、中でも九〇〇年代に成立（あるいは、成立基盤を持つ）文学作品を対象に、その「語り」と「書記」のあり方について考察したものである。具体的には、歌物語とジャンル分けされる『伊勢物語』と『大和物語』、現存する物語作品としては最古の長編である『うつほ物語』、そして、『枕草子』の四作品を対象としている。なぜ、これらの作品であるのか。一つには、文学史的にはバラバラのジャンルに位置付けられる作品であるがゆえに、見過ごされてきた関係性を見通すためという意図がある。もう一つ、平安時代のみならず日本古典の最高傑作とされる『源氏物語』より前に成立した作品の意義を見直すことで、『源氏物語』もまた数々の先行作品の蓄積のもとで成立したことを改めて見直したい、という理由がある。

前者は、大学を含む学校教育における日本文学史が、ジャンル分けされて教えられることによって、同時代性を捨象しかねないことへの違和感による。現在、筆者が教えている日本文学史の授業で使われているテキストでは、和歌、物語、日記、随筆、説話、歌謡とジャンル分けされている。それぞれのジャンルで平安初期から院政期までの作品が並んでいるわけだが、それによつてジャンルを超えた同時代性や近い時代における作品の相互影響関係が見えなくなってしまう。もちろん、文学「史」である以上、最初に年表が示されているものの、

その年表が本来的に示している同時代性までを読み解くことは難しい。平安時代と言っても四百年ほどあるわけ、歴史の持つ「縦」の世界観ばかりではなく、同時代を見渡す「横」の世界観によって捉えられるものを見ていきたい、本書を構成する論文の多くはこの思いによって書かれている。

後者は、筆者のものととの研究基盤が『源氏物語』以後にあることにも拠る。文学史を行ったり来たりして研究を続けてきた中で見えてきたのは、『源氏物語』の影響ばかりが強いわけではないこと、むしろ『源氏物語』より以前の作品への意識が明確にある作品が多いことであつた。それはもちろん『源氏物語』も例外ではなく、先行する作品を明示的に利用する場合や、明らかな引用だとはわからないよう巧妙に利用する場合もある。そうした関係性は前後の作品を読まない限り浮かび上がってこない感覚だろう。『源氏物語』の巧妙さは、先行する作品のエッセンスをふまえているものの、それを明確な形で示していないことがある、ということだ。気づく人には気づく、そういった論証不可能なものが多くちりばめられている。現代ではもはや気づくことすら不可能なものもあるだろう。しかしながら、現存している作品の中から探ることはまだあるはずで、『源氏物語』に限らず多くの古典作品は先行する作品を無視しては読み解けないのである。

こうした問題意識のもと、読み解くキーワードとして浮かびあがったのは、「歌語り」である。『大和物語』研究にとっては当たり前に使われているタームであるものの、論者によって「歌語り」の使い方が違うことへの疑念がある。それは「歌語り」なるものの実態として、「口承の世界」があつたことを素朴に認めているか否かに起因するであろうが、書かれたものの中からしか想定できない限り、「口承の世界」を立ち上げることに筆者は懐疑的である。筆者は「歌語り」を書記されたものから立ち上がる、語り手によって示された「歌とそれにま

つわるエピソード」と捉え、実態的な口承の世界としては理解しない。今後の論考でも繰り返し示しているが、「口承の世界」が歴史的現実の中にあつた可能性は否定しない。だが、それを証明することは不可能である。むしろ、そうした「語り」の世界を幻視させていくような「書記」のあり方とは何か、ということを経験的な疑問として本書の考察はある。いま、われわれの目の前にあるのは、書かれた作品である。その中には語り手や登場人物による「語り」が多く含まれており（もちろん、語りだけではなく書かれたものも多く含まれている）、その「語り」が信用すべきものなのか、信用ならざるものなのか、それは書かれた作品を享受する側に拠る。「語り」と「書記」。九〇〇年代の作品には、その試行錯誤のありようが見てとれる。本書のみで、そのありようの全貌は明らかににはならないが、九〇〇年代の作品の関係性を見ていくことで、その端緒をひらきたい。

本書は大きく三篇に分け、各篇四章または三章で構成している。以下、各章の概要を示しておきたい。

第一篇は歌物語を対象とし、『伊勢物語』と『大和物語』を取り上げた。第一章では、『伊勢物語』における「後人注」とよばれる部分を「語り直し／語り加え」と位置付け、物語正文として読むこと、こうした「語り直し／語り加え」のあり方が、『大和物語』における在中将章段や『うつほ物語』の〈絵解〉と関わる可能性を考察した。第二章では『大和物語』と『後撰和歌集』や他の私家集との比較から、独自の歌話採録の方法があることを論じた。同時代的に成立した和歌集との比較によって、ゴシップ集と評されてきた『大和物語』が、けつして単なるゴシップを集めたものではなく、意図をもってエピソードを書き記していることが明らかになった。第三章、第四章は、特定の登場人物に関わる複数の章段を対象としている。第三章では宇多天皇皇女、桂の皇女の和歌（特に贈歌）は「手紙」の形で登場し、『大和物語』が口承の「歌語り」を書き記したものではなく、「書き

記したものを基盤としている以上、口承の「歌語り」を信用するわけにはいかないことを、第四章では、醍醐天皇皇女、柔子内親王の和歌が「省筆」されることに注目し、作り物語における省筆との関連性を指摘し、「書き記さない」ことで喚起される物語世界の意図を論じた。

第二篇では『うつほ物語』を対象として、「語り」と「書記」から考察した四編をまとめた。第一章では物語内に描かれる藤原兼雅には、歌物語における色好みの主人公像が重ねられており、兼雅にまつわる女性との描写は「歌語り」的であることから、そうした一世代昔の主人公の造型を持つ男性登場人物は、この物語の主人公とならないことを論じた。第二章では、『うつほ物語』における膨大な会話文には音楽性が関わり、「声」を「書記」しようとする挑戦であったこと、一方で〈絵解〉の文章は、語り手による「語り直し／語り加え」であることを論じた。音楽を主題とする物語作品において、単に音楽を表記しようとしただけではなく、多様な「音」を「書記」しようとしていたことの重要性はあらためて考えられるべきであろう。第三章においては、第二章で論じた会話文のうち、「内侍のかみ」巻における朱雀帝と仁寿殿の女御の会話をとりあげ、朱雀帝が「語る」ことによって立ち上がる世界が、物語にどのような意味を与えるのかについて考察した。第四章では、「書記」の問題から、和歌なものに「書きつく」という表現に着目し、『うつほ物語』独自の「書きつく」行動の意図と、それとは異なる使い方をする『源氏物語』を論じた。

第三篇は『枕草子』を対象とし、第一章・第二章では中宮定子における長い語りがなぜ書き記されたのかを考察した。第一章で取り上げた「清涼殿の丑寅の隅の」章段と第二章で取り上げた「殿などのおはしまさで後」章段は対応しており、前者は中関白家隆盛の時期において、定子自身が自らと清少納言を筆頭とする女房集団を中

心とした新しい文化を立ち上げるべく、定子の長い語りがあったことを、後者では道隆の死後、長徳の変の暗い影が落ちた時期において、清少納言の再出仕により定子を中心とした輝かしい文化サロンを再び営むべく、そのために必要な集団の融和を女房たちに自覚させようとするために定子の長い語りがあったことを論じた。第三章では「雪山の章段」において「語りの場」が示されていることに注目し、定子と清少納言たちの「雪山の賭」を語るのが、清少納言ではなく一条天皇と定子であると「書記」して残すものであったことを論じた。以上、三作品を通して、「語り」や「書記」をテーマとして、ある作品同士においてはその影響関係も考慮にいれながら論じたものである。

「語り」と「書記」、このテーマによって九〇〇年代を見通す作業は、今後も継続しなければならない。今回、取り上げた作品研究の深化はもとより、まだ着手できていない作品へと視野を広げたい。特に、日記に関しては『土佐日記』、『蜻蛉日記』の二作品、物語では、『平中物語』と『落窪物語』、そして、九〇〇年代半ばに流行する物語的私家集の存在である。物語的私家集は歌物語からの発展でもありながら、『蜻蛉日記』へ継承され、さらには『和泉式部日記』へつながる。『和泉式部日記』が物語とも読めるのは、こうした文学史的連携があるからである。

一方で、現実的な記録のように見える『土佐日記』にも和歌は不可欠であり、『落窪物語』においても落窪の姫君の詠む和歌が道頼の心を動かしていく。近年、残念なことに九〇〇年代成立の古典作品への研究成果は減少の一途である。『竹取物語』を含めれば、『伊勢物語』、『土佐日記』、『大和物語』、『蜻蛉日記』、『枕草子』：中等教育における教科書に掲載されている作品の多くが、作品による差はあれども活発に研究されていない現状では、

古典文学の「延命」は果たすことが出来ないのではないか。古典文学であつても読んで面白く楽しいこと、現代人の美意識に古典文学が関与していることなど、中等教育において伝えてほしいことは多くある。本書ではそうした問題意識を反映することは出来なかったが、改めて九〇〇年代作品への見直しが急務であることを本書によって提起しておきたい。

第一篇